

「発生と構造」について

加藤 恵 介

キーワード…発生、構造、現象学

要旨

のちに『エクリチュールと差異』に収められたデリダの一九五九年の講演「発生と構造」と現象学」について、これに先立つ『フッサール哲学における発生の問題』と、その後彼がフッサール現象学の「脱構築」を試みた『声と現象』との間での位置づけを試みる。

デリダは、修士論文にあたる『フッサール哲学における発生の問題』（一九五三―五四）の執筆後、『声と現象』においてフッサール現象学の「脱構築」に取り組むまでに、一九五九年の講演「発生と構造」と現象学」でフッサールを扱ったあと、一九六二年にフッサールの晩年の草稿「幾何学の起源」の翻訳に詳細な序説を付けて出版している。ここでは、この「発生と構造」と現象学」について、これに先立つ『発生の問題』およびその後の『声と現象』等におけるフッサール読解との関係を跡づけることを試みる。

一．発生の問題

『発生の問題』によれば、「発生」の問題がフッサールの哲学において重要であるのは、それが「絶対的始まりへの要請と、究極的な哲学的準拠としての体験の時間性」とを同時に主題化する哲学」（PG3/4）だからである。つまり、カントや新カント派の形式

主義のように、超時間的で非実在的なアプリアリなもの、時間的、経験的なアポストリオリなものを分離するのではなく、両者の結合が問題にされねばならず、それはまさに「発生」の問題である。

フッサールの静態的現象学は、「発生」を内世界的なものともみなして排除しており、ノエシス／ノエマ関係に閉じ込められているため、現実的な発生をそのものとして扱うことができず、それゆえ発生の現象学への移行は必然的である。発生の現象学は、「超越論的な発生」（CM68/122）、すなわち「超越論的な我自身の構成の問題」（66/120）を導入する。デリダはフッサールのいう「受動的発生」に、構成する我と構成される我の間の弁証法を見いだしている。しかしデリダによれば、この弁証法は現象学的な意味の領野のうちに留まるものではなく、そこには「存在論的なもの」「現実的なもの」が再導入されねばならない。

フッサールによれば「あらゆる自我論的な発生の普遍的形式」とは「時間」(77/137)である。デリダによればこの「時間」は、もはや自我によって構成された時間ではなく、それゆえ現象学的還元のない時間であるが、他方でこれは還元されたはずの現実の自然的時間と区別されない。「超越論的で起源的な現象学的時間性が「時間化させるもの」、構成するものであるのは、見かけだけのことであり、超越論的意識自体とは無関係で、その意識に先行してこれを包み込む「自然的」時間を起点としてのみそのようなのではないか」(PG13/14)。そうだとすれば、「超越論的なものと内世界的なものの区別が崩壊」(8/10)し、現象学的前提自体が崩壊することになる。

フッサールの歩みは、この可能性に近づきながら、常にすでに構成された「意味」の領域に留まり、この可能性を排除するプロセスとして描き出される。「発生の問題はフッサールの思想のきわめて重要な動機であると同時にディレンマを引き起こす契機でもあり、彼は絶え間なくその契機を拒絶あるいは隠蔽したように思われる」(35/41)。彼は『算術の哲学』から晩年の草稿に至るまでのフッサールのテキストを通覧しながら、フッサールが常に、この「発生」の契機によって促され、新たな段階に移行しながら、結局は常に、すでに構成された意味の次元にとどまることによって、真の発生に至らなかったことを示そうとする。「発生」は、フッサールの哲学における特権的な主題であったと同時に、それ自体が、フッサールの哲学を弁証法的に発展させる契機となる矛盾を形成したことになる。フッサール哲学における「発生」の問題は、翻って「フッサール哲学の、その生成における理解」(66/6)において、フッサールの思想自体を弁証法的に生成するものとして理解

することを強いる。

しかしこの事態を、通常の意味での「弁証法」という観念で捉えるのは「凡庸で曖昧」であり、「不十分で間違っている」(55/6)。それが扱うのは、超越論的な現象学によれば、すでに構成された世界内での対立にすぎない。そこでいう「弁証法」とは内世界的な弁証法にすぎず、超越論的な問題設定を欠いている(86/6)。オヤカヴァイエスのいう「弁証法」は、このような「内世界的」なものとなる。デリダが要請するのは「超越論的な「根源的」弁証法、すなわち超越論的な意識と内世界的な現実のあいだの弁証法である。しかし、この弁証法には本質的な困難が予想され、彼自身も具体的に示すことはできなかったように思われる。

二．「弁証法」の放棄

『発生の問題』が書物として出版された際(一九九〇年)に付された序言で、彼はこの論文とその後の彼の思索との関係を要約している。

一方では、この著作のフッサール読解の従う法則は、「そのとき以来、私が明らかにしようと試みたすべてのことを、その定式化の一字一句に至るまで要請し続けることになる」。そこで問題にされるのは、「いかなる分析もその現象において呈示し、現前化することや、あるいは構成要素の瞬時的で自己同一的な点的性質に還元することのできない、根源の根源的な錯綜であり、単純なるものの原初的な混交＝感染であり、端緒における隔たりである」。支配的な問いは、「いかにして基盤の根源性がアプリアリな総合でありうるのか。いかにしてすべてが錯綜から始まりうるのか」であった。それ以来「混交＝感染」という言葉自体が不可欠なも

のとして私に課され続けた」。この「混交＝感染」の運命的な必然性」によって、「現象学的言説が構成される基盤となるすべての境界」が、問いただされる。それは「超越論的／「内世界的」、「形相的／経験的、志向的／非志向的、能動的／受動的、現前的／非現前的、点的／非点的、根源的／派生的、純粹的／不純的、等々」である (PG VI-III/vii-ix)。

しかし他方で、この「根源の根源的混交＝感染」は、「後に私が放棄せねばならなかった」「根源的弁証法という名称」で呼ばれている。彼はここでチャン＝デュク・タオとカヴァイエスの名を挙げているが、彼によればタオの「弁証法的唯物論」やカヴァイエスの「学知の弁証法」は「内世界的」な弁証法であり、彼はこれに対して、フッサール現象学の現象学的還元と超越論的問題設定を維持しながら、構成的、超越論的次元に及ぶ弁証法、すなわち「根源的弁証法」を提唱するのである。それは現象学的還元を経ながら、それによって得られる根本的な区分、「超越論的／「内世界的」、「形相的／経験的」の二項対立のうちに相互の「混交＝感染」を導入する。

デリダは、「混交＝感染」に基づくフッサール読解を『幾何学の起源』への「序論」(六二年)と『声と現象』(六七年)のなかで継続するが、「弁証法」という語は、最終的に完全に消え去るか、あるいはさらに、それなしであるいはそれから離れた所で差延や根源における代補や痕跡を考えねばならなかったその問うものを指し示すようになった (PG VI-III/vii-ix)。つまり「その問うもの」については同一でありながら、彼は「弁証法」を離れた別のアプローチで、「差延」「根源の代補」「痕跡」という「脱構築」を特徴づける概念によってこれを考えることになった。

では彼は、どこでこの「弁証法」という概念を放棄したのだろうか。

『幾何学の起源』序説においては、まだ時間性の構造が「弁証法的」と呼ばれている。「あらゆる構成の究極の基礎である原初的な時間化の運動は一貫して弁証法的であること、そして、真正なすべての弁証法が望むように、それは、弁証法——未来予持と過去把持の相互的で還元しえない、果てしない含みあい——と弁証法——生ける現在の絶対的かつ具体的な同一性、つまりあらゆる意識の普遍的形式——の弁証法に他ならないことを見てきた」(OG157-8/38)。

ここでは「発生の問題」にみられたような、現象学の基本的な区別である超越論的な意識と内世界的な現実との間の弁証法という野心的なモチーフは失われており、弁証法は時間性の構造のみを呼ぶものへと縮小されている。そしてここではまだ、「原初的な時間化の運動」が、直接語られていることが注目される。つまり、「弁証法」の放棄は、この「時間化の運動」について直接的に語ることを断念して、「痕跡」に依拠することに対応している。

『グラマトロジー』に至って、「弁証法」という概念自体への根本的な批判がみられる。弁証法は、現在中心の「現前の形而上学」に属するものとして批判される。

フッサールは、『内的時間意識の現象学』において、現在をすでに過去把持によって構成されたものとした。しかし、「現前の単純性を破壊することは、単に潜在的現前の諸地平を、つまり未来予持と過去把持との一つの「弁証法」を、考慮に入れることではない」。「そのような複雑化、つまりまさしくフッサールが記述したような複雑化は、大胆な現象学的還元にも関わらず、直線的、

対象的、世界的な形の明証性、現前だけにこだわっている」(DG97-8/137)。それゆえ、「ここであれわれは現象学の限界を通り抜けている」(99/139)。「間化としての原エクリチュールが、現前の現象学的経験においてそのものとして与えられることはありえない」(99/139)。「現象学的還元と、超越論的经验へのフッサールの準拠とを、言説の単なる一契機として位置付けなければならぬ。経験一般の、フッサールにあつてはとりわけ超越論的经验の概念が、なお現前性という主題により支配されている限り、それらは痕跡の還元に加担している」(90-1/123)。

つまりここで、フッサールの時間講義における、現前と過去把持の関係が「弁証法」と呼ばれ、しかしこれは、彼のいう「現前の形而上学」に属するものとされる。つまり、「時間化の運動」について直接語ることは、「超越論的经验」に依拠することによらねばならず、しかしこの「経験」は、現前に依拠することにより、現前において与えられない「原エクリチュール」「痕跡」の「還元」に加担している。このように、「弁証法」の放棄は、「現前の形而上学の脱構築」への移行と対応する。

三、発生と構造

『エクリチュールと差異』に収録された「発生と構造」と現象学が講演として発表されたのは一九五九年であり、これはレヴィ・ストロースの『構造人類学』の出版の翌年にあたる。ここでデリダは、「構造主義」の台頭にもなって論議されることになった「構造か発生か」という二者択一、すなわち、共時的な、それ自体において時間を含まない「構造」と、通時的な、歴史的变化を孕んだ「発生」の対立を取り上げる。

「構造」と「発生」は、フッサールにおける静態的現象学と発生の現象学の関係に重なりあうものだが、フッサールにおいて、両者は対立するものではなく「弁証法的」(ED229/310)な関係にある。この捉え方は『発生の問題』から変化を見せていないように見える。

フッサールは、心理学主義やデイルタイ的な歴史主義を批判しながら、同時にカント的な形式主義をも退け、「論理的または数学的イデア性」の、「いっさいの事実的意識からの規範的自立性」と「一般的でありながら具体的な主観性への根源的依存性」を同時に両立させようとした(235/316)。そのために、心理学主義も論理学主義も離れて、超越論的经验を発見せねばならなかった。心理学主義と歴史主義を拒むため、「現象学の最初の局面」すなわち静態的現象学は、経験主義、相対主義に導く「内世界的発生」すなわち心理学的、事実的な発生を還元するという意味で「構造主義的」だが(235/317)、発生一般が除外されるのではなく、次の段階で「超越論的発生」を取り上げる発生の現象学に進まねばならない。この記述は、『発生の問題』におけるのと基本的に同じ捉え方を示している。

『デカルト的省察』によれば、「その我にとつてすでに一つの構成された世界があるという制約」のもとにある静態的現象学は、「二つの必然的な段階」であり、「我々はそこから出発して、それに属する発生の法則の形式を開示することによって初めて、形相的で最も普遍的な現象学」すなわち発生の現象学の可能性を見ることができ(279/140)。このように、フッサールにおいて「構造か発生か」という対立、二者択一は存在しない。

そのうえでデリダが「自らの意図」として示そうとするのは次

の二点である。

1. 「発生」と「構造」という二つの概念の使用の下にある論争が存しており、「この論争は記述の歩みを規制すると共にそれに律動を与え、記述にその「生氣」を付与するのだが、この論争の未完性は、現象学の太いなる段階各々を不均衡な状態におくことで、新たな還元と解明を無際限な仕方では必要不可欠なものたらしめる」

2. 「この論争は、純粹に記述的な空間とその探求の超越論的主張を、歴史の形而上学に向けて侵犯することをフッサールに強いているように見える」(ED232/313)。

この二点は、彼が『発生の問題』でフッサールの哲学のうちに見いだした弁証法的発展と、同じ見方に従っている。

四. 「開口」について

デリダによれば、静態的現象学から発生的現象学への移行が必然的であるのは、現象学が開く超越論的領野が、完結したものとして閉じられない性格を持つこと、すなわちその「開域」の不可可能性による。このことについて、デリダはいくつかの理由を挙げている。

それはまず、フッサールが、数学のような精密な学と、厳密な学としての現象学を対照しているように、「構造的現象学を閉じることの、原理的、本質的、構造的な不可能性」(ED242/324-5)である。「意識の諸本質、それゆえ「諸現象」一般の諸本質は、数学的な型の一つの構造や「多様体」に属することはできない」(241/324)。そこには、「体験の無限の開口」、「意識への無限なものへの侵入」があり、これが時間的流れの統一を可能にしている。

この「開口」を、デリダは、ノエマとヒュレーのうちに見ている。

ノエマとは意識の志向的、非実的成素であり、「世界にも意識にも属さない」。いかなる領域にも、原一領域にも、ノエマは実的に帰属せず、「ノエマのこのアナキーは、客観性と意味の根であり、可能性そのものである」。それは「存在の「ありのまま」への開口」であり、それゆえこれについては「超越論的還元は隠蔽的なものに見えうる」。「開口の超越性は同時に根源にして敗北、一切の構造と体系的構造主義の可能性の条件にして不可能性である」(242/326-7)。ここでいわれる「存在の「ありのまま」への開口」は、『発生の問題』で、現象学的な意味の領野のうちに、「弁証法」によって内世界的現実が導入されようとした企図を受け継ぐものと考えられる。

他方で、ヒュレーは「体験の実的ではあるが非志向的な構成要素」「志向的形式による一切の生氣づけに先立つ情動の感性的質料(体験されるが現実的なものではない)」である。それは「純粹受動性の、この非志向性の極」であり、「この受容性は本質的な開口でもある」。フッサールが「すでに構成されたヒュレー・モルフェーの相関関係に満足している」のは彼の分析が「すでに構成された時間性の内部で展開されているから」である。しかしヒュレーは、「その最も深いところでは」「時間的質料」「発生そのものの可能性」である(243-4/327-8)。

デリダがヒュレーをもう一つの「開口」として捉えるのは、修士論文における、ヒュレーを両義的なものと捉える解釈を受け継いでいるのだろうか。そこでは「ヒュレーは、そのものとしては、志向の意味を付与される以前は、同様に内世界的実在でも現象学

的実在でもあるのではないだろうか」と問われている (PG154/154)。しかしヒュレーとは、非志向的な、意識の内在的、実的成素であり、現象学的還元の通常の理解からすれば、「内世界的実在」でもあるものと見なすことはできない。後の『グラマトロジー』においては、このヒュレーを両義的なものとする先の議論を彼自身否定し、オーソドックスな解釈に戻っている。「経験されたものの実的(実的であつて現実的ではない)成素、ヒュレー／モルフェーという構造は、現実ではない。志向的対象についていえば、たとえば映像の内容は、実的には世界にも生きたものにも属さない。それは、生きたものの非実的成素である」(DG94/127)。

さて、ノエマとヒュレーという「開口のこれら二つの極において、いつさいの意識の超越論的構造の内部そのもので、発生的構成へと、この新たな「超越論的感性論」へ移行する必然性が現れるだろう」。ここでは、他者と時間がテーマとなり、「他者と時間の構成は、現象学を、現象学の「原理中の原理」(われわれによれば、現象学の形而上学的原理、すなわち根源的明証にして事象そのもののありのままの現前)がそこで根底的に問いに付されるような地帯へと送り返す」。「構造論から発生論への移行の必然性」は、「断絶、転回の必然性」である (ED244/328)。

このノエマとヒュレーという二つの「開口」についての議論は、現象学的な意味の領域のうちに「内世界的現実」を導入するといふ『発生の問題』の問題系の延長線上にあるが、この問題自体は直接的には扱われなくなっており、その代わりに、静態的現象学から発生的現象学への移行の必然性を示すものとされる。さらにこの必然性は、すでに、後に「現前の形而上学」として扱われる

「現象学の原理中の原理」すなわち「根源的明証」としての「現前」を問題化するものとされる。ただし、「開口」としての「ノエマ」と「ヒュレー」という主題は、この後みられなくなる。

五. 還元について

この後の『声と現象』において、フッサール現象学のうちに「現前性の形而上学」が指摘され、その「脱構築」が企てられることになる。「発生と構造」とその後のテキストとの関係を簡単にみておきたい。

まず、静態的現象学が「閉域」、閉じた構造となりえず、本質的な開口を持つことの指摘は、後の「脱構築」的読解と共通している。しかし、ここではこの閉域の不可能性すなわち開口は、静態的現象学から発生的現象学への移行の必然性として、フッサール自身の意図として語られている。

他方で『声と現象』においては、この「開口」によって「脱構築」的読解が可能になる。すなわちこの「開口」は、フッサールが現象学を構造的に閉じようとする意図にあらがうものとして位置づけられる。すると「脱構築」の可能性はこの意図の想定に依存しているのだろうか。すなわちテキストのうちに、フッサールの形而上学的な意図、欲望を読み込む必要があるのではないだろうか。『声と現象』においてその「現前の形而上学」への帰属が示されるのは静態的現象学についてであり、そのために読解は静態的現象学の内部にとどまっている。

他方で『発生の問題』以来、デリダは超越論的現象学と現象学的還元を、哲学的言説に必須のものとしており、この点は一貫している。

『発生の問題』によれば、「もしアプリアな諸本質の描写から始めないのであれば、決していかなる厳密さを求めることもできないだろう。実存それ自体は、その最も起源的なたち現れにおいて、哲学的な眼差しに対して現れることはできないだろう。したがって、経験的あるいは実存的な起源性や発生への何らかの先行契機の名においてフッサールの本質主義に対してなされたいっさいの批判は、意味を有するために、すでに構成された形相分析を前提とせねばならないだろう」。これは「いっさいの哲学にとっての基本前提」である (PG225/224)。「哲学の絶対的起点は本質主義的でなければならぬ」(226/224)「いっさいの考察はこの観念論を引き受けなければならず、そうでなければ、混乱と不誠実の中にとどまることになる」(226/225)。

「発生と構造」においては、「構造」と「発生」について語るためには、経験主義に陥ってはならず、現象学的還元を通過しなくてはならないことが主張される。「現象学的空間が発見されない限り、超越論的記述が企てられない限り、「構造—発生」の問題はいかなる意味も持たないように見える」。というのは「客観的意味作用の異なった諸領域を分離する構造の観念」も、「一方の領域から他方への移行を乱用する発生の観念」も、客観性の概念を前提としており、客観性の意味と価値の保証がなければ、発生と構造の概念は意味を持たない。各領域の構造の意味を明らかにするのは、権利的に第一のものである現象学的批判であり (ED36/318)、現象学的批判のみが、心的なものとは何か、歴史的なものとは何かという問いに答える。

『グラマトロジー』によれば、「現象学的還元と、超越論的経験へのフッサールの準拠とを、言説の単なる一契機として位置づけ、

なければならない」。一方では、「経験一般」あるいはフッサールにおいては特に「超越論的経験」の概念が現前によって支配されている限り、それは「現前の形而上学」への帰属を示している。しかし、それは現前を構成する根源的な非現前をも示すものであり、「痕跡についての思惟は、超越論的現象学還元されることも、これと手を切ることもできない」(DG90-1/123-4)。あるいはたとえばソシュールのいう「聴覚映像」について、この「聞かれた存在」は現実の「聞かれた音」とは区別されねばならず、「この微妙ではあるが絶対的に決定的な異質性は、現象学的還元によってしか分離され得ない」。「現象学的還元は、「聞かれた存在」のあらゆる分析にとって不可欠である」(93/126)。「超越論的批判のひとつの「手前」とひとつの「彼方」があり」(90/122)、現象学の限界が示されるためにも、これを通過する必要があるとされる。

六. エクリチュールについて

「発生と構造」において、デリダはノエマとヒュレーのうちに、現象学の「開口」の可能性を見て取っていたが、その後これについての議論を展開していない。

その後の彼の思索は、「エクリチュール」「差延」といった概念に依拠することになる。後年彼の語るところによれば、彼がエクリチュールの概念を着想したのは『幾何学の起源』序説からであり (SP21/30)、「差延」という用語の初出は一九六五年のアルトール「息を吹き込まれた言葉」としているが (22/31)、じっさいにはいずれも「発生と構造」と現象学」にすでに見られる。「差延」(ED239/322) という語に関しては、ほぼ「遅延」という意味で使われており、後に彼が定める「遅延」と「差異化」を共に意味す

るといふ意味合いは明確ではない。

他方、「エクリチュール」については、『幾何学の起源』への「序説」を予告する形で触れられている。

彼はここで発生的現象学の「三つの道」を区別する。第一の道は「論理的な道」、第二の道は「自我論的な道」、第三の道は「歴史―目的論的な道」であり、この「理性の目的論」の道において、エクリチュールが主題となる。

「理性とは歴史の中で生起するロゴス」であり、「ロゴスは自己を指して、自分自身に対して、言い換えるならロゴスとして自ら現れるために、自ら自己を語り、自己を聴取するために存在を貫く。ロゴスは自己―触発としての発話である。すなわち、自己が語るのを聞くことである。ロゴスは、自己において、自己へのその現前の「生ける現在」の中で自己を取り戻すために、自己の外へ出る。自己自身の外へ出ること、自己が語るのを聞くことは、エクリチュールの迂路を通じて、理性の歴史の中で自らを構成する。自己が語るのを聞くことはこのように、再び自己と適合するために、自己と差異化する。『幾何学の起源』は、内世界的刻印における理性のこの曝露の必然性を記述している」(248-9/333-4)。

ここでは、『幾何学の起源』におけるエクリチュールによるイデア性の構成の議論が予告されると同時に、これと「自己が語ることを聞く」とこととの結びつきにおいて、『声と現象』の議論もまた予告されている。ここではまだ「歴史的発生」の問題として限定されていたこの議論がイデア性の構成の問題として全面的に展開されるのだが、この後の「現象学の脱構築」を導くことになる。

・引用した著作を次の略号で表わし、原著と邦訳の頁数を示した。引用訳文はそれぞれの邦訳を使用または参照させていただいたが、必要に応じて変更を加えている。

CM: Edmund Husserl, *Cartesianische Meditationen*, Meiner, 1977. 浜渦辰二訳『デカルト的省察』、岩波文庫、二〇〇一年。

OG: Edmund Husserl, *L'origine de la géométrie*, traduction et introduction par Jacques Derrida, PUF, 1962. 田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳『幾何学の起源』、青土社、一九八〇年。

PG: Jacques Derrida, *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, PUF, 1990. 合田正人・荒金直人訳『フッサール哲学における発生の問題』みすず書房、二〇〇七年。

ED: Jacques Derrida, *L'écriture et la différence*, Points, 合田正人・谷口博史訳『エクリチュールと差異』、法政大学出版局、二〇一三年。

DG: Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit, 1967. 足立和浩訳『根源の彼方に』(上)現代思潮社、一九八三年。

VP: Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, 4. ed., PUF, 2010. 林好雄訳『声と現象』ちくま学芸文庫、二〇〇五年。

SP: Jacques Derrida, *Sur parole*, L'aube, 1999. 林好雄・森本和夫・本間邦夫訳『言葉のつて』ちくま学芸文庫、二〇〇一年。